

## 『栃尾電鉄 沿線景勝観光鳥瞰図』について

## Stydy on “Tochio Dentetsu Ensen-keikan-kankou-cyoukanzu”

<span>平山 育男</span>
<span>HIRAYAMA Ikuo</span>

キーワード: 鳥瞰図、吉田初三郎、栃尾鉄道

Keywords：bird’s-eye view, YOSHIDA Hatsusaburou, Tochio-tetsudou


#### 1 はじめに

長岡商工会議所の平成 20(2008)年 1 月発行の『会報』510 号巻末<sup>1)</sup>に、越後交通株式会社所有にかかる鳥瞰図である『栃尾鉄道 沿線景勝観光鳥瞰図』<sup>2)</sup>及び『中越自動車 交通路線景勝鳥瞰図』が掲載された。図版はかなり縮小がかかったものであるため文字の読み取りは難しかったが、かすかに前者からは「初三郎」の文字を読み取ることができた。

「鳥瞰図」、「初三郎」と並べば「吉田初三郎」でしかない。手元の資料で見ると、いずれのものも一般には余り知られてはいないようである<sup>3)</sup>。早速、越後交通に連絡を取り、両資料の閲覧及び撮影を申し込むと快く承諾を頂いた。平成 20(2008)年 1 月に早速本社へ伺い、実物を拝見させて頂いたが、その大きさと精密さには驚いた。落ち着いた資料を見るといずれのものにも制作年月日などの記載はなく、担当の方のお話しでも、制作の経緯は今となってはもはや分からないとのことであった。

そこで、本稿では先ず『栃尾電鉄 沿線景勝観光鳥瞰図』について内容の紹介を行い、次いで描写及び記載された内容の検討から、鳥瞰図の制作年代とその背景、この作品が意味する点を考察するものである。

#### 2 『栃尾電鉄 沿線景勝観光鳥瞰図』について

本鳥瞰図を図 1 に示し、その概要と文字情報の全てを図 2 に書き起こした。なお、図 2 では便宜的に鳥瞰図を横に 4 等分して向かって左から「A」「B」「C」「D」、上下に 2 等分し上から「1」「2」と区画した。このため以下では具体的な地名等の位置をこの記号で□囲みで適宜示すこととする。例えば、本図向かって左下に記される「上見附」の地名は〔A2〕となる。

##### ・大きさと体裁

本資料は額装がなされ、額を含めた全体の大きさが横 1,550 mm×縦 582 mm となる。表側は金色地の紙が貼られた上に鳥瞰図を描いた絹布が貼られる。この大きさが横 1,193 m×縦 438 m で、この絹布地に 1,184 m× 424 mmの大きさと線を引き、この内側に鳥瞰図を多色の肉筆画で描く。

##### ・内容

本資料では、向かって右上〔D1〕に縦書きで「栃尾／電鉄／沿線／景勝／観光／鳥瞰／図／初三郎作 落款」<sup>5)</sup>と記される。なお、長岡商工会議所『会報』における題名にはこの 3 行目以下の文言が用いられたのであろう。

画面は中央に黄色の線が引かれて線上には列車が描かれ、「栃

尾」-「楡原」-「上北谷」-「太田」-「本明」-「明晶」-「上見附」-「名木野」-「耳取」-「椿沢」-「加津保」-「浦瀬」-「宮下」-「小曽根」-「下新保」-「下長岡」-「中越高校前」-「袋町」-「長岡」-「高校前」-「大学前」-「土合口」-「長倉」-「悠久山」の駅名から、この区間に敷設された栃尾電鉄の線路であることが分かる。赤線は傍らに「バス」との記載があり線上にはバスも描かれることから、バス路線と判断される。「長岡」-「袋町」-「川崎」-「宮路」-「浦瀬」-「椿沢」-「耳取」-「上見附」-「見附市」-「長岡」-「下新保」-「亀貝」-「富島」-「比礼」-「本津川」-「北荷頃」及び「比礼」から分岐する「軽井沢」-「一ノ貝」方面、「長岡」から「川崎」で分岐して-「片貝」-「栖吉」-「鉢伏住宅地」-「土合口」-「大学前」を経て長岡へ戻る路線が描かれる。当時の国鉄線は「宮内」-「長岡」-「押切」-「見附」の区間が記され、〔A2〕には「至新潟」、〔D2〕 欄外の上越線方面には「至東京・長野」、同じく〔D2〕下欄外の信越線方面には「至柏崎・直江津」との記載がある。川は「信濃川」を〔C2〕~〔D2〕に描き、「刈谷田川」を〔A2〕に記す。山並みは画面中央上の〔B1〕~〔C1〕に「守門山」があり、周囲に「キビタキ小屋」「スキー場」「ヒュッテ」「キャンプ場」「道院池」、少し離れて「布滝」「西山ライン」を描く。〔D1〕には「鋸山」「風谷山」を置き、周囲には「不動滝」「柳市池」「百間堤」を配する。〔B1〕の栃尾市街際に「鶴城山」があり、図のはば中央〔B1〕に「高津谷高原」、この周囲に「展望台」「油田」「ケープル予定線」、やや離れて「高津城趾」を配する。

町並みは、〔A1〕~〔B1〕に「栃尾市」、〔B2〕に「見附市」〔C1〕~〔D1〕に「長岡市」を記す。この内、栃尾市周辺には「秋葉神社」「秋葉公園」「七曲り」、川を挟んで「□□スキー場」「栃倉遺蹟」がある。見附市周辺には「**観音山公園**」<sup>6)</sup>、長岡市街には「市役所」「商工会議所」や「栃尾電鉄本社」「バス車庫」などの施設を始め、「新潟大学工学部」「長岡高校」「新潟大学長岡分校」「長岡女子高校」「長岡工業高校」などの学校、「長興寺」「栄涼寺」の寺院が記される。また、市街地では「文高」「文中」「文小」などの記号も見られ、順に高校、中学校、小学校を示すものと考えられる。一方、〔D2〕には「蒼柴神社」「悠久山公園」を中心として、「悠久山スキー場」「博物館」「お猿電車」「総合グランド予定地」「ローラースケート」「悠久山球場」「悠久山ホテル」「成田不動」などの施設を描いている。

##### ・構成

全体を通してみると、上部に空、下部に信濃川を描く。そして真ん中に「守門山」、その前方に「高津谷高原」を配し、山裾は緩い円弧を描くことから、高い位置から俯瞰した鳥瞰図として、地球の円周を意識させるものとも考えられる。

平面の構成は悠久山が少し大きく描かれ、その前方に位置する「鉢伏地藏」「鉢伏住宅」「長岡温泉」がやや信濃川に近く描かれている。また、「高津谷高原」一帯も油田施設、「展望台」などの書き込みが詳細である。

##### ・文字表記の方法

栃尾電鉄の駅は原則、青色で長丸を描き、白地に黒で駅名を書くが、悠久山、長岡、浦瀬、上見附、栃尾の各駅は緑色線の長丸内部を青地として白で駅名を記す。なお、「栃尾市」「見附市」「長岡市」の市の名前は緑色の線で長方形を書き、青地に白線で表記し、全体としても目立つものとなっている。

国鉄線駅、バス停及び地名も一般の駅名と同様に、緑色で長丸を書き、白地に黒で文字を記すが、国鉄「押切」駅は、画面上に直接「押切」と記される。

その他の施設名称は大多数が青線で長方形を書き、白地に黒で名称を書くが、「秋葉公園」「**観音山公園**」「悠久山公園」「電鉄遊園地」は黄色地に黒で文字を記す。

なお、資料上には鉛筆と思われる筆記具による書き込みが 3

カ所見られる。1 つは〔D2〕栃尾電鉄悠久山－長倉間で「0.609K」、次いでその左側に当たる長倉－土合口間に「1.593」と記されるが、これらはいずれも悠久山駅から各駅までの営業km数を示すものとなっている。もう 1 つは〔A2〕に「長岡油田」と記されるもので、槽のようなものが 4 基、長方形が 1 つ描かれる。

#### 3 『栃尾電鉄 沿線景勝観光鳥瞰図』の発行年代

この鳥瞰図が描かれたのはいつ頃であろうか。画面には制作年代が描かれていないため、記載内容を検討することで、この考察をしたい。

そこで先ず基礎的な作業として、本鳥瞰図の文字情報を表 1 にすべてまとめた。そして表では情報の主なものに読みと用途を付し、各記載が囲まれる下地の形、下地を囲む線の色、下地の色、文字線の色について記した。

ところで本図をよく観察すると、地名などの記載及びそれらを囲む下地は古色を帯びるものと、新しい 2 種類を見ることができた。例えば、〔B1〕「□□スキー場」は下地の新しい白色は半分程剥落しており、この下に「スキー場」の文字を読むことができる。そこで、地名などの下地が明らかに新しいものには表 1 の「新旧」欄に「N」、古いと考えられるものは「O」と記した。

また、各施設等については開設年月日などを表 1 の「開設など」欄、その根拠を「出典」欄に示した。

以上を踏まえ、各々の開設年代などを見て本鳥瞰図の制作年代を考えてみよう。

先ず、鉄道の開設状況を見ると、当時の国鉄線では信越本線が北越鉄道として、一ノ木戸－長岡間が明治 31(1898)年 6 月 16 日、長岡－北条間が同年 12 月 27 日に開通し全通を果たし、上越線は、大正 9(1920)年 11 月 1 日に宮内－東小千谷間が開通、昭和 6(1931)年 9 月 1 日に全通を果たしており<sup>7)</sup>、本図ではいずれもそれ以後の様子を示すものとなっている。

栃尾鉄道の開通は大正 4(1915)年 2 月 14 日に浦瀬－栃尾間<sup>8)</sup>、同年 6 月 5 日に下長岡－浦瀬間<sup>9)</sup>、翌大正 5(1916)年 9 月 9 日に下長岡－長岡間<sup>10)</sup>、大正 8(1919)年 12 月 1 日に上見附駅移転完成<sup>11)</sup>、大正 13(1924)年 5 月 1 日に悠久山－長岡間が開通し全通した<sup>12)</sup>。なお、各駅の開設状況などは表 1 に記した通りであるが、特に戦後では、昭和 26(1951)年 11 月に「太田」、昭和 28(1953)年 6 月に「土合口」、「高校前」、「名木野」、昭和 30(1955)年 6 月に「家政高校前」の各停留所が新設されている<sup>13)</sup>。なお、家政高校は翌昭和 31(1956)年 4 月 1 日に中越高校に改名されており、それを受け駅名も変更されたが、鳥瞰図では旧称を改めて「中越高校前」としている点は注目すべきである。つまり、本鳥瞰図では最終的にこれらの改正結果を全て反映したものである。なお、栃尾鉄道では昭和 23(1948)年にいち早く電化が実施された。鳥瞰図では加津保－椿沢間と栃尾寄りの長岡駅手前路線上に 2 両編成の箱形車両が記載されるのはこれを示すものであろう。ところで、栃尾電鉄の〔A2〕「上見附」向かって左側には「予定駅」の記載を見ることができる。これは昭和 27(1952)年 11 月に予定されたものであったが、これらも本図には盛り込まれていることとなる<sup>14)</sup>。

バス路線では、昭和 28(1953)年 4 月に長岡－栖吉、10 月に北長岡－上見附、11 月に長岡－宮路、川崎－栖吉、長岡－東片貝、昭和 29(1954)年 3 月に宮路－浦瀬、5 月に東片貝－栖吉、浦瀬－高津谷、昭和 30(1955)年 4 月に新町 5 丁目－公会堂前、5 月に高津谷－軽井沢、昭和 31(1956)年 4 月に大手通り－新町－浦瀬－比礼－東津川－北荷頃の路線が開設され<sup>15)</sup>、鳥瞰図に描かれるものの、昭和 32(1957)年 11 月開設の伏鉢－長倉間の路線<sup>16)</sup>は記載があるものの不正確である。

一方、悠久山周辺の施設を見てみよう。「悠久山スキー場」は

大正 7(1918)年の開設<sup>17)</sup>で、「悠久山公園」は大正 8(1919)年 5 月に竣功した<sup>18)</sup>。大正 15(1926)年 8 月にはプールが建設され<sup>19)</sup>、「成田不動」が昭和 14(1939)年に建立を受けた<sup>20)</sup>。戦後では昭和 24(1949)年 7 月に「悠久山球場」が完成、「悠久山ホテル」が 8 月に開業<sup>21)</sup>、「博物館」は昭和 26(1951)年 8 月開設<sup>22)</sup>、昭和 29(1954)年 7 月に「ローラースケート」場開設、昭和 31(1956)年 8 月からは「お猿電車」の運転を行っている<sup>23)</sup>。以上のものはいずれも鳥瞰図には描き込まれるが、昭和 33(1958)年開設のスキー場リフト<sup>24)</sup>の記載はない。

その他の施設を見ると、守門山<sup>25)</sup>付近では、昭和 28(1953)年 10 月に「ヒュッテ」、東山油田付近では昭和 31(1956)年 7 月に「展望台」が完成し<sup>26)</sup>、これらが鳥瞰図に記載される。

地名では、「栃尾市」「見附市」の記載に注目したい。栃尾市は昭和 29(1954)年 6 月 1 日の市制施行、見附市は同年 3 月 31 日の施行となる。いずれも市として鳥瞰図には書き込まれる。

更に問題となるのは〔D1〕に記載される題名の一節である。題名には長岡商工会議所『会報』が用いた「栃尾鉄道」ではなく、実は「栃尾電鉄」と記されるのである。栃尾鉄道が栃尾電鉄の名称を名乗るのは昭和 31(1956)年 11 月 20 日に行われた第 86 回定期株主総会以後のことで、登記は 11 月 29 日とされているのである<sup>27)</sup>。


以上の記載内容を勘案すると「栃尾電鉄」による、本鳥瞰図は昭和 31(1956)年末頃までの情報は余すところなく盛り込まれており、翌年以後のものに記載はないか不正確である。これらのことから本図の制作は昭和 31(1956)年末頃と判断するのが妥当であろう。

#### 4 吉田初三郎と『栃尾電鉄 沿線景勝観光鳥瞰図』

以上の考察から、本鳥瞰図の制作は昭和 31(1956)年末頃と考えることができるのであるが、この点を作者である吉田初三郎との関係で見るとどうなるのであろうか。先ずここでは生前に 2000 種を越える作品群を残したとされる吉田初三郎の経歴を見てみよう<sup>28)</sup>。

初三郎は明治 17(1884)年、京都にある泉家に生まれた。生年月日 1 月 2 日ともされるが、戸籍上は 3 月 4 日とされ、1 才で父を亡くした後は、母方の吉田姓を名乗った。幼少時から画才があり、小学校卒業後、10 才で西陣にある友禪図案師へ丁稚奉公に出るも、主人が急死したため、16 才の時京都にある三越の友禪図案部へ移っている。待遇としては恵まれたものの、絵画勉学の志は止まず、18 才の時、上京して赤坂溜池の白馬会研究所へ入所している。20 才で徴兵となり日露戦争からの帰還後は、京都の鹿子木塾の門下へ入るも、経済的な理由もあり恩師の勧めで、明治 45(1912)年「吉西社」を興し、いわゆる看板屋、本人云うところの「ペンキ屋」へと転身することとなった。当初は必ずしも本意ではなかったものの、恩師の紹介により仕事は軌道に乗って経済的にも安定し、年来の結核も克服している。さて、初三郎の決定的な転機は大正 3(1914)年、30 才に訪れる。前年、京阪電車から依頼を受けて描いた沿線の名所案内である「京都御案内」が、男山八幡を訪れた皇太子(昭和天皇)の目に止まり激賞を受けることとなったのである。これが契機となり、初三郎は各地の名所誌を手がけ、大正 6(1917)年には「大正広重」を名乗りはじめている。以後、社名も「大正名所図案社」と改めてこの道を邁進し、昭和時代初期頃には「初太郎式鳥瞰図」とも称される独自の画風を確立するに至ったのである。社業の方は大正 7(1918)年、工房を東京の大田区大井町にも構え、社名は「大正名所図絵社」に改めたが、関東大震災で罹災をしたために工房を愛知県犬山の蘇江に移し、翌年には「観





図1『栃尾電鉄 沿線景勝観光鳥瞰図』越後交通株式会社 所蔵

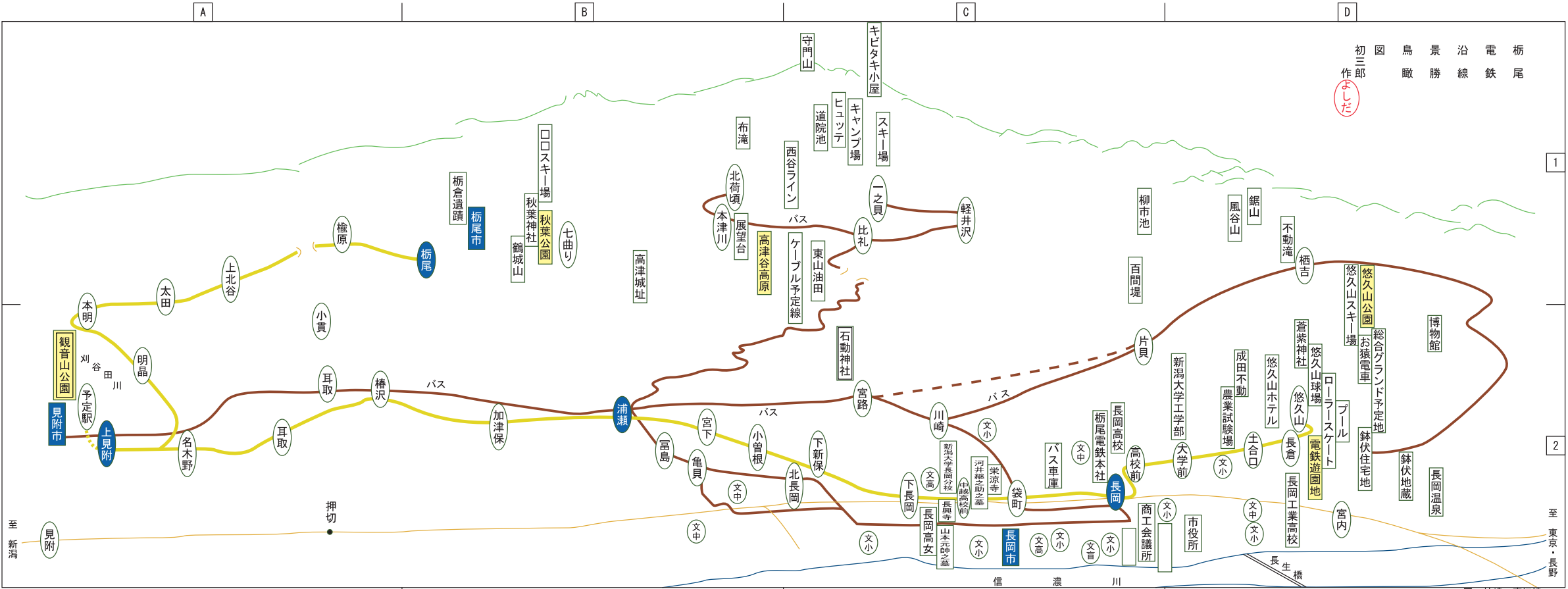


図2『栃尾電鉄 沿線景勝観光鳥瞰図』の描き起こし

光社」を名乗ることとなる。更に、昭和7(1932)年には青森県八戸の種差に、京都と愛知に並んで3つめの工房となる「潮観荘」を開設している。ところが昭和11(1936)年に、内部の事情で蘇江の工房は閉じられ、昭和12(1937)年の軍機保護法<sup>29)</sup>施行後は、鳥瞰図の作成・印刷が難しくなってしまう、以後終戦までは絵はがき、ポスターの制作に当たらざるを得なくなった。朝鮮と漢口に支社を設けたものの、不遇の時代であったと云える。自身も前後5回に渡る従軍があり、2人の息子についてはニューギニアとフィリピンから戦死の報を受けた。終戦は熊本県の疎開先で知り、直前には米軍による爆撃の被弾を庭先に受けている。戦後は昭和21(1946)年、幻の作ともされる「原子爆都広島画譜」を皮切りに、数々の鳥瞰図を残した初三郎であったが、晩年の昭和28(1953)年には火災のため「潮観荘」を失い、神経痛、脳溢血、丹毒などの病に冒され、臥することも多かった。そして昭和30(1955)年8月16日、71才の年、京都の自宅において没したのである。

さて、この経歴から判断すると、本稿で扱った昭和31(1956)年制作『栃尾電鉄 沿線景勝観光鳥瞰図』完成時、既に初太郎は死没していたこととなるのである。この間の事情はどのように考えるべきなのであろうか。

戦後、初太郎は不遇に見回れ、仕事の量は戦前の最盛期には遠く及ばなかったものの、昭和20(1945)年以後でも200種程の作品を残したとされる<sup>30)</sup>。特に昭和28(1953)年頃からは、市町村の合併が進み、関係する自治体からの依頼も増えたという。そのような中で、初太郎が施主に渡した遺作は相馬市と綾部市のものとされる。但し、綾部市のものは印刷作品に署名押印がないことから、完成作としては前者の「相馬市景観鳥瞰図」であるとされる<sup>31)</sup>。

このように見て来ると『栃尾電鉄 沿線景勝観光鳥瞰図』は前後の事情はあるものの、なんとか完成に漕ぎ着け、栃尾電鉄の元に届けられたものと判断することができるのである。しかし、

①情報としては初三郎死後のものが書き込まれていること

②古粉を塗り、書き改めた箇所のあること

などは、どのように考えることができるのであろうか。

①については以下のような事情を見ることができる。初太郎の死後も会社としての観光社は存続し、社長であった息子の阿瀬庄太郎(通称清水超太郎)がその運営に当たった。なお、庄太郎の役割は営業面であって、これを制作面で支えたのが吉田朝太郎であった。朝太郎は初三郎の養子で、長期間にわたり初三郎の側近として仕えた。朝太郎は「二代目初太郎」を名乗ったともされる<sup>32)</sup>が、死の直前に朝太郎は初三郎の逆鱗に触れ破門の扱いを受け、葬儀に出ることすら許されず、二代目襲名もなかったと云う<sup>33)</sup>。但し、庄太郎と朝太郎の関係は良好で、作品制作の依頼を続けたという。このように考えると、作品制作自体は初三郎の死後も、旧門弟の朝太郎により続けられていたことが予想される<sup>34)</sup>。なお、最晩期の初三郎は体調もすぐれず、作品は朝太郎が描き、署名などは初三郎が担ったとされる<sup>35)</sup>。

以上を勘案すると、『栃尾電鉄 沿線景勝観光鳥瞰図』の制作もこのような事情に関わるもので、それ故に初三郎の死後における情報も画面内に盛り込まれたものと考えることができるのである。

②の古粉を塗った上での訂正については、同時期の作品と比較することで背景を知ることができる。『栃尾電鉄 沿線景勝観光鳥瞰図』とはほぼ同時期、すなわち昭和30(1955)年頃の作品とされる「女川港鳥瞰図」は、やはり修正が不十分とされる<sup>36)</sup>。この作品も同じような背景の元で描かれたのであろう。つまり、最晩年の初三郎はそれまでのような徹底した取材もままならず、訂正も多くあったのだらう。そして訂正を受けたのが上述した

庄太郎の観光社で、実際の作業を行ったのが破門を受けた朝太郎であったのだらう。

なお、『栃尾電鉄 沿線景勝観光鳥瞰図』は、昭和27(1952)年の作とされる『塩竈市鳥瞰図』<sup>37)</sup>などと極めて類似する色彩を有しており、まさしく、初三郎最晩年の作と見ることができるのである。

## 5 『栃尾電鉄 沿線景勝観光鳥瞰図』の構図

本鳥瞰図の構成は既に述べた通り、中央に守門山を配するもので、守門山を含む山裾全体が円弧を描き、この表現は地球の丸み自体を描こうとしたものとも見ることができる極めてスケールの大きな構成となっている。

初三郎はこれまでも太平洋の沖に「ハワイ」、日本海の向こう側に「ウラジオ」(ウラジオストック)を描くこともしており<sup>38)</sup>、「見えないもの」をあたかも「見えるように」描くこと、それは「初三郎式鳥瞰図」といわれるその真骨頂といえる。つまり、初三郎の手による鳥瞰図は、一般的鳥瞰図が採るアイソメトリック図法(等角投影図法)などに則るものではなく、遠近法も巧みに取り入れ、初三郎的な構成がそこに加味されるが故、独自の「味わい」を生み出し、後に引く強い印象を与えるのであろう。それでは本鳥瞰図を描くに当たって初三郎が意を注ぎ込んだともいえる、守門山を中心とする構成はどのような発想で生み出されたのであろうか。最後にこの問題を考えてみたい。

初三郎による鳥瞰図を数々見て行くと、画面の中心に山や島を配する構成の多いことに気付く。これは強調すべき点を画面の最も目立つ場所に据えることによって構成を安定させ、当該地域の特徴をより分かりやすく示すことが可能になる利点を持つ。それでは本図において初三郎はどのように考えて、この「守門山」を中心とする構成にたどり着いたのであろうか。

栃尾鉄道による鳥瞰図は実はもう1枚存在する。「栃尾鉄道沿線案内」所収の「栃尾鉄道沿線図絵」(図3)<sup>39)</sup>である。「栃尾鉄道沿線図絵」は昭和2(1927)年の制作であるが、初三郎の手によるものではない。これは大正11(1922)年11月、初三郎の門下を破門となった<sup>40)</sup>小山吉三、金子常光らが発足させた日本名所図絵社によるもので、落款などから金子常光が作図を行っていることが分かる。大正13(1924)年に栃尾-長岡-悠久山間が全通させた栃尾鉄道にとって、大正15(1926)年8月、悠久山にはプールが建設されており、この時期は旅客増大のため沿線における一段の観光宣伝に乗り出す必要があり、そのような目的の下に制作されたのが「栃尾鉄道沿線図絵」を掲載する「栃尾鉄道沿線案内」と考えることができる。印刷物であるため、この図が戦前期において長岡周辺において多くの人々の目に止まったことは間違いのないだらう。そして、戦後になって栃尾電鉄から新たな鳥瞰図の作成を依頼された初三郎が、この図を目にできなかったことはないはずだ。否、むしろ栃尾電鉄側からはこの「栃尾鉄道沿線図絵」を引き合いに出され、これを越える出来映えを持つ作品を要求されたと考えてもおかしくはない。

それでは両図の決定的な違いはどの点にあるのであろうか。

これを見るには「栃尾鉄道沿線図絵」の構成を見ておく必要があるだらう。以下、同図の構成を簡単に述べておきたい。

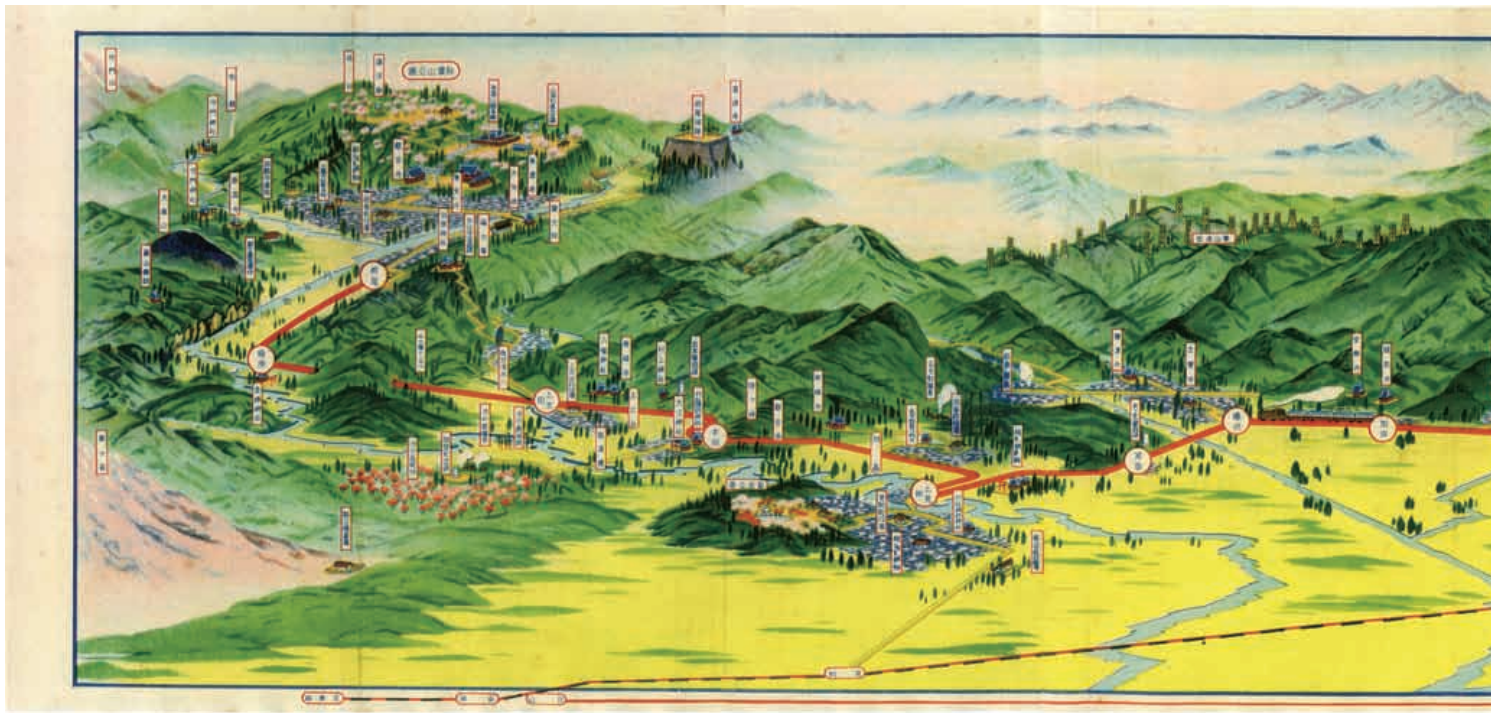
「栃尾鉄道沿線図絵」では、東山油田を画面のほぼ中央に描き、向かって左上に栃尾、向かって右下に長岡の町並み、向かって右上に悠久山を配置し、ここに比較的忠実に栃尾鉄道の路線を配している。そして、これらの背景となる越後山脈を構成する山々は遠景となり、近景の栃尾、長岡、悠久山などに対しては小さく描かれている。そして、件の守門山は画面向かって左端に追いやられ、画面に入るのは南側斜面のみで、山頂は描



表1 『栃尾電鉄 沿線景勝観光鳥瞰図』に見られる記述

	地名	用途	下地形	下地色	下 周囲線	地名線	新旧	所在	開設など	出典・備考
A 1	楡原	栃尾鉄道駅	長丸	白	緑	黒	O	長岡市楡原	大正 4 (1915).2	越後交通社史p.237
A 1	上北谷	栃尾鉄道駅	長丸	白	緑	黒	O	見附市神保町		
A 1	太田	栃尾鉄道駅	長丸	白	緑	黒	O	見附市太田町		
A 2	小貫	地名	長丸	白	緑	黒	O	長岡市小貫		
A 2	本明	栃尾鉄道駅	長丸	白	緑	黒	O	見附市本明町	大正 4 (1915).2	越後交通社史p.237
A 2	明晶	栃尾鉄道駅	長丸	白	緑	黒	O	見附市明晶町	大正 4 (1915).2	越後交通社史p.237
A 2	観音山公園	観光地	長方形	黄	緑	黒?	O	見附市嶺崎ほか		読み取り不可
A 2	予定駅	栃尾鉄道駅	長丸	白	緑	黒	O	見附市本町	昭和 27 (1952).11	越後交通社史p.273
A 2	見附市	バス停	長方形	青	緑	白	O	見附市本町	昭和 29 (1954) 年 3 月 31 日	
A 2	上見附	栃尾鉄道駅・バス停	長丸	青	緑	白	N	見附市南本町	大正 4 (1915).2 開業 大正 8 (1919) 12 / 1 移転	越後交通社史p.237、238
A 2	刈谷田川	川	なし	なし	なし	黒	O	見附市		
A 2	名木野	栃尾鉄道駅	長丸	白	緑	黒	O	見附市名木野町		
A 2	耳取	栃尾鉄道駅	長丸	白	緑	黒	O	長岡市耳取町	大正 4 (1915).2	越後交通社史p.237
A 2	耳取	バス停	長丸	白	緑	黒	O	長岡市耳取町		
A 2	椿沢	栃尾鉄道駅・バス停	長丸	白	緑	黒	O	長岡市椿沢町	大正 4 (1915).2	越後交通社史p.237
A 2	見附	国鉄駅	長丸	白	緑	黒	O	見附市柳橋町		
A 2	押切	国鉄駅	なし	なし	なし	黒	O	長岡市池之島	明治 34 (1901).9 / 1 開業	長岡歴史辞典p.51
A 2	至新潟	欄外表示	なし	なし	なし	黒	O	ー		
B 1	布滝	観光地	長方形	白	緑	黒	N	長岡市栃堀		
B 1	北荷頃	バス停	長丸	白	緑	黒	O	長岡市北荷頃		
B 1	本津川	バス停	長丸	白	緑	黒	N	長岡市本津川		
B 1	展望台	ケーブル駅	長方形	白	緑	黒	N	長岡市浦瀬町ほか	昭和 31 (1956).7 完成	越後交通社史p.271
B 1	高津谷高原	観光地	長方形	黄	緑	黒	O	長岡市加津保町		
B 1	高津城趾	観光地	長方形	白	緑	黒	N	長岡市加津保町		
B 1	□□スキー場	観光地	長方形	白	緑	黒	N	長岡市		
B 1	七曲り	地名	長方形	白	緑	黒	O	長岡市		
B 1	秋葉公園	公園	長方形	黄	緑	黒	O	長岡市谷内		
B 1	秋葉神社	神社	長方形	白	緑	黒	O	長岡市谷内		
B 1	鶴城山	山	長方形	白	緑	黒	O	長岡市栃尾町		
B 1	栃尾市	市名	長方形	青	緑	白	N	長岡市	昭和 29 (1954).6 / 1 市制	栃尾市史下p.481
B 1	栃倉遺蹟	遺跡	長方形	白	緑	黒	O	長岡市金沢		
B 1	栃尾	栃尾鉄道駅	長丸	青	緑	白	N	長岡市栄町	大正 4 (1915).2	越後交通社史p.237
B 2	バス	バス路線	なし	なし	なし	黒	O	長岡市栄町		
B 2	加津保	栃尾鉄道駅	長丸	白	緑	黒	O	長岡市加津保町	大正 4 (1915).2	越後交通社史p.237
B 2	浦瀬	栃尾鉄道駅・バス停	長丸	青	緑	白	N	長岡市浦瀬町	大正 4 (1915).2	越後交通社史p.237
B 2	宮下	栃尾鉄道駅	長丸	白	緑	黒	O	長岡市宮下町		
B 2	小曾根	栃尾鉄道駅	長丸	白	緑	黒	O	長岡市小曾根町		
B 2	富島	バス停	長丸	白	緑	黒	O	長岡市富島町		
B 2	亀貝	バス停	長丸	白	緑	黒	O	長岡市亀貝町		
B 2	文中	長岡市立富曾亀中学校	丸	白	緑	黒	O	長岡市城岡	昭和 28 (1953) 北中に合併	ふるさと長岡のあゆみp.264
B 2	文中	長岡市立北中学校	丸	白	緑	黒	O	長岡市東蔵王	昭和 28 (1953) 富曾亀中合併	ふるさと長岡のあゆみp.264
C 1	守門山	山	長方形	白	緑	黒	O	三条市・魚沼市		
C 1	キビタキ小屋	山小屋	長方形	白	緑	黒	O	長岡市		
C 1	スキー場	スキー場	長方形	白	緑	黒	O	長岡市		
C 1	キャンプ場	キャンプ場	長方形	白	緑	黒	O	長岡市		
C 1	ヒュッテ	ヒュッテ	長方形	白	緑	黒	O	長岡市	昭和 28 (1953).10 完成	越後交通社史p.271
C 1	道院池	池	長方形	白	緑	黒	N	長岡市		
C 1	西谷ライン	地名	長方形	白	緑	黒	N	長岡市		
C 1	一之貝	バス停	長丸	白	緑	黒	O	長岡市		
C 1	軽井沢	バス停	長丸	白	緑	黒	O	長岡市		
C 1	バス	バス路線	なし	なし	なし	黒	O	長岡市		
C 1	比礼	バス停	長丸	白	緑	黒	O	長岡市		
C 1	東山油田	施設	長方形	白	緑	黒	O	長岡市		
C 1	柳市池	池	長方形	白	緑	黒	N	長岡市		
C 1	百間堤	施設	長方形	白	緑	黒	N	長岡市		
C 2	片貝	バス停	長丸	白	緑	黒	O	長岡市		
C 2	バス	バス路線	なし	なし	なし	黒	O	長岡市		
C 2	石動神社	神社	長方形	白	緑	黒	O	長岡市		
C 2	宮路	バス停	長丸	白	緑	黒	O	長岡市		
C 2	川崎	バス停	長丸	白	緑	黒	O	長岡市		
C 2	下新保	栃尾鉄道駅・バス停	長丸	白	緑	黒	O	長岡市	大正 5 (1916).8	越後交通社史p.237
C 2	北長岡	国鉄駅	長丸	白	緑	黒	O	長岡市		
C 2	長岡高校	高校	長方形	白	緑	黒	O	長岡市		
C 2	栃尾電鉄本社	会社	長方形	白	緑	黒	N	長岡市		
C 2	高校前	栃尾鉄道駅	長丸	白	緑	黒	O	長岡市		
C 2	長岡	国鉄・栃尾鉄道駅	長丸	青	緑	白	O	長岡市		
C 2	文中	長岡市立東中学校	丸	白	緑	黒	O	長岡市	昭和 35 (1960) 移転	ふるさと長岡のあゆみp.264
C 2	バス車庫	バス車庫	長方形	白	緑	黒	N	長岡市		
C 2	袋町	栃尾鉄道駅・バス停	長丸	白	緑	黒	O	長岡市		
C 2	栄涼寺	寺院	長方形	白	緑	黒	N	長岡市		
C 2	文小	川崎小学校	丸	白	緑	黒	O	長岡市		
C 2	河井継之助之墓	墓地	長方形	白	緑	黒	O	長岡市		

C 2	中越高校前	栃尾鉄道駅	長丸	白	緑	黒	N	長岡市	昭和 31(1956).4/1 改名	長岡市制100年のあゆみp.126
C 2	新潟大学長岡分校	大学	長方形	白	緑	黒	O	長岡市	昭和 24(1949).6/1 発足	長岡市制100年のあゆみp.110
C 2	文高	長岡家政学園高等学校	丸	白	緑	黒	O	長岡市	昭和 23(1948)発足	
C 2	下長岡	栃尾鉄道駅	長丸	白	緑	黒	N	長岡市		
C 2	文小	新町小学校	丸	白	緑	黒	O	長岡市	昭和 10(1935)分離創設	ふるさと長岡のあゆみp.264
C 2	ー	ー	長方形	白	緑	黒	O	長岡市		
C 2	商工会議所	長岡市商工会議所	長方形	白	緑	黒	N	長岡市		
C 2	市役所?	長岡市役所	長方形	白	緑	黒	N	長岡市		
C 2	文小	神田小学校	丸	白	緑	黒	O	長岡市	昭和 23(1948)分離	ふるさと長岡のあゆみp.264
C 2	文盲	長岡聾学校	丸	白	緑	黒	O	長岡市		
C 2	文小	表町小学校	丸	白	緑	黒	O	長岡市	昭和 14(1939)移転	ふるさと長岡のあゆみp.264
C 2	文高	長岡商業高等学校	丸	白	緑	黒	O	長岡市	昭和 23(1948)発足 昭和 49(1974)移転	
C 2	長岡市	地名	長方形	青	緑	白	N	長岡市		
C 2	文小	中島小学校	丸	白	緑	黒	O	長岡市	昭和 26(1951)再開	ふるさと長岡のあゆみp.264
C 2	長興寺	寺院	長方形	白	緑	黒	N	長岡市		
C 2	山本元帥之墓	墓地	長方形	白	緑	黒	N	長岡市		
C 2	長岡女子高校	高校	丸	白	緑	黒	O	長岡市	昭和 25(1950)改称 昭和 42(1967)移転開校	長岡歴史事典p.214
C 2	信濃川	川	なし	なし	なし	黒	O	長岡市		
D 1	鋸山	山	長方形	白	緑	黒	N	長岡市栖吉町		
D 1	風谷山	山	長方形	白	緑	黒	N	長岡市栖吉町		
D 1	不動滝	滝	長方形	白	緑	黒	N	長岡市栖吉町		
D 1	栖吉	バス停	長丸	白	緑	黒	O	長岡市		
D 1	悠久山公園	公園	長方形	黄	緑	黒	O	長岡市		
D 1	悠久山スキー場	スキー場	長方形	白	緑	黒	N	長岡市	大正 7 (1918)開設 昭和 33(1958)リフト開設	長岡歴史事典p.355
D 2	博物館	博物館	長方形	白	緑	黒	N	長岡市	昭和 26(1951).8 開設 昭和 53(1978)移転	長岡市制100年のあゆみp.114
D 2	お猿電車	施設	長方形	白	緑	黒	N	長岡市	昭和 31(1956).8 ～ 昭和 30(1955).8/1	越後交通社史p.271 長岡市制100年のあゆみp.126
D 2	蒼柴神社	神社	長方形	白	緑	黒	N	長岡市		
D 2	総合グランド予定地	施設	長方形	白	緑	黒	N	長岡市	昭和 38(1963)中越高校建設	長岡歴史事典p.191
D 2	プール (?)	施設	長方形	白	緑	黒	O	長岡市		
D 2	ローラースケート	施設	長方形	白	緑	黒	N	長岡市	昭和 29(1954).7 開設 昭和 29(1954).7/1	越後交通社史p.271 長岡市制100年のあゆみp.120
D 2	悠久山球場	施設	長方形	白	緑	黒	N	長岡市	昭和 24(1949).8/5	長岡市制100年のあゆみp.110
D 2	悠久山	栃尾鉄道駅	長丸	青	緑	白	N	長岡市		
D 2	悠久山ホテル	施設	長方形	白	緑	黒	N	長岡市	昭和 25(1950).8/1	長岡市制100年のあゆみp.112
D 2	成田不動	寺院	長方形	白	緑	黒	N	長岡市	大正 14(1925)建立	長岡市史通史下p.434
D 2	新潟大学工学部	大学	長方形	白	緑	黒	O	長岡市	昭和 24(1949).6/1 改組 昭和 55(1980)移転	長岡市制100年のあゆみp.110、176
D 2	長岡温泉	温泉	長方形	白	緑	黒	O	長岡市	昭和 28(1953)湯本館開業	長岡歴史事典p.214
D 2	鉢伏地藏	寺院	長方形	白	緑	黒	N	長岡市		
D 2	鉢伏住宅地	施設	長方形	白	緑	黒	N	長岡市		
D 2	電鉄遊園地	施設	長方形	黄	緑	黒	O	長岡市		
D 2	長倉	栃尾鉄道駅	長丸	白	緑	黒	O	長岡市		
D 2	農業試験場	施設	長方形	白	緑	黒	O	長岡市		
D 2	土合口	栃尾鉄道駅	長丸	白	緑	黒	O	長岡市		
D 2	文小	四郎丸小学校	丸	白	緑	黒	O	長岡市		
D 2	大学前	栃尾鉄道駅	長丸	白	緑	黒	N	長岡市		
D 2	宮内	国鉄駅	長丸	白	緑	黒	O	長岡市		
D 2	長岡工業高校	高校	長方形	白	緑	黒	O	長岡市	昭和 15(1940)移転 昭和 23(1948)より現称	長岡歴史事典p.91
D 2	文中	南中学校	丸	白	緑	黒	O	長岡市		
D 2	文小	千手小学校	丸	白	緑	黒	O	長岡市		
D 2	長生橋	橋梁	なし	なし	なし	黒	O	長岡市	昭和 12(1937).10 架橋	長岡歴史事典p.194、195
D 2	市役所	施設	長方形	白	緑	黒	N	長岡市	昭和 29(1954).9 鉄入式	長岡市制100年のあゆみp.120
D 2	至東京・長野	ー	なし	なし	なし	黒	O	ー		
D 2	至柏崎・直江津	ー	なし	なし	なし	黒	O	ー		



かれていない。つまり「栃尾鉄道沿線図絵」では全体として描かれる景観は鳥瞰図の構成としては遠近法をやや意識しながら比較的正確を期して描かれ、初三郎のものとかなり異なる構成となるのである。

初三郎によれば、彼が鳥瞰図を描くに際して幾つかの経過を踏んだとされる。彼はその段階に

- (一) 実地踏査写生
- (二) 構想の苦心
- (三) 下図の苦心
- (四) 着色
- (五) 装幀、編輯
- (六) 印刷<sup>41)</sup>

を挙げ、特に「構想」「下図」を「苦心」として挙げている。つまり初三郎が鳥瞰図の制作に際して特に心掛けた点は「構図上の苦心」であったわけで、この点にこそ他との差異が明確に表れてもおかしくはない。また初三郎は、

平面図を立体的に鳥瞰的に再現するのであれば、其の骨組みの根本は、自然のまゝの山水布置にあるのであらうが、私ののは決して然うではない。従つて私の作品に於いては、必要と思はれる中心点が随所で拡大されて、他は其の交通関係を示しつつ、全体の調子を繋いでをるに過ぎないのである。<sup>42)</sup>

としている。つまり初三郎は自分の鳥瞰図が全く平面図をもととして、正確を旨に描いたわけではないとしているのである。これを『栃尾電鉄 沿線景勝観光鳥瞰図』に当てはめて考えれば、初三郎は本来、画面の端に置かれるはずの「守門山」を中心点に据えて、「悠久山」や「東山油田」などを拡大し、それらを鉄路・バス路線によりつないだと言えるのである。

ここまで述べれば両者の違いはもう明らかであろう。両者を図の正確さから比較すれば軍配は金子常光の「栃尾鉄道沿線図絵」に上がる。しかし、構図の大胆さはどう見ても初三郎の側に一日の長があると言ってよい。その理由は上で述べたように

初三郎が独自に採った構図の故であり、この点こそ初三郎が「苦心」した点であったためである。

## 6 さいごに

『栃尾電鉄 沿線景勝観光鳥瞰図』の考察は、当初、初三郎が描いた長岡に関する鳥瞰図原本が現存することから、本鳥瞰図の制作年代を知りたいという、単純な理由から始まった。しかし、鳥瞰図読解のための作業を始め、同時に初三郎の詳細な年譜を知るとともに、数々の疑問と矛盾に襲われることとなった。但し、他の初三郎の作品群の比較、先行する研究などと照合から、これらの疑問も大方を解くことができたと考える。最後に本論のまとめを箇条的に挙げておきたい。

- 1) 越後交通所有の『栃尾電鉄 沿線景勝観光鳥瞰図』は、横1,193 mm×縦438 mmの絹布地に極彩色で描かれ、「初三郎」の銘と「よしだ」の落款を有するもので、栃尾電鉄沿線の全景が鳥瞰図として記される。
- 2) 画面に描かれる年代は昭和31(1956)年の末頃と判断するのが妥当である。なお、一部に古粉による修正の痕跡を見ることができる。
- 3) 吉田初三郎は昭和30(1955)年8月、京都の自宅において71才で没している。初三郎の死後、弟子であった朝太郎が描きつなぎ、本作品を納めるに至ったものと考えられる。
- 4) 『栃尾電鉄 沿線景勝観光鳥瞰図』において初三郎は先行する「栃尾鉄道沿線図絵」が採る構図を改め、守門山を中心とするものとしたと考えることができる。

## 謝 辞

『栃尾電鉄 沿線景勝観光鳥瞰図』の撮影に際しては、越後交通株式会社社長岸本虎雄様はじめ、同社の皆様には一方ならぬご協力を頂いた。記して謝意を申し上げる次第である。なお図1の撮影は本学工房職員である畔上咲子、図2の浄書は研究室の小熊陽介君にお願いした。





図3『栃尾鉄道沿線図』新潟県立図書館 所蔵

## 注 記

- 1) 長岡市商工会議所：会報510、28頁、平成20(2008).1
- 2) 「栃尾鉄道」は昭和31(1956)年11月20日に称号を「栃尾鉄道株式会社」から「栃尾電鉄株式会社」へと変更している。本稿では本資料の名称は、資料自体に記される「栃尾電鉄」を用い、その他については「栃尾鉄道」と「栃尾電鉄」の名称を時代的に適宜使い分けることとする。
- 3) 藤本一美：吉田初三郎の鳥瞰図原画一覧、古地図研究307、平成12(2000).3、には初三郎の作品が120点紹介されるものの、両作品はいずれも漏れている。
- 4) 本資料の名称を、前述の長岡商工会議所会報では「栃尾鉄道の『沿線景勝観光鳥瞰図』」としたが、本稿では資料自体に記される記載を尊重し、『栃尾電鉄 沿線景勝観光鳥瞰図』とする。
- 5) 「／」は改行を示す。以下同様。
- 6) 資料からの判読は難しいが、配置などから判断した。
- 7) 日本国有鉄道旅客局：日本国有鉄道停車場一覧、139頁、日本交通公社、昭和60(1985).9
- 8) 越後交通株式会社：越後交通社史、236頁、昭和60(1985).10。なお開通は2月10日、営業運転2月14日とする。
- 9) 越後交通株式会社：越後交通社史、237頁、前掲
- 10) 越後交通株式会社：越後交通社史、238頁、前掲
- 11) 越後交通株式会社：越後交通社史、238頁、前掲
- 12) 越後交通株式会社：越後交通社史、239頁、前掲
- 13) 越後交通株式会社：越後交通社史、268頁、前掲
- 14) 越後交通株式会社：越後交通社史、273頁、前掲
- 15) 越後交通株式会社：越後交通社史、270頁、前掲
- 16) 越後交通株式会社：越後交通社史、273頁、前掲
- 17) 長岡市：長岡歴史事典、355頁、平成16(2004).3
- 18) 今泉省三：長岡の歴史5、509頁、昭和47(1972).2
- 19) 越後交通株式会社：越後交通社史、248頁、前掲
- 20) 長岡市：長岡市史通史編下、434頁、平成8(1996).3
- 21) 越後交通株式会社：越後交通社史、263頁、前掲
- 22) 長岡市：長岡市政100年あゆみ、114頁、平成18(2006).3
- 23) 越後交通株式会社：越後交通社史、271頁、前掲
- 24) 長岡市：長岡歴史事典、355頁、前掲
- 25) 国土地理院なども「守門岳」の名称を用いるが、混乱を避けるため本稿では「守門山」の名称を用いる。
- 26) 越後交通株式会社：越後交通社史、271頁、前掲
- 27) 越後交通株式会社：越後交通社史、267頁、前掲
- 28) 長瀬昭之助：鳥瞰図絵師 吉田初三郎、262～263他、日本古地図学会出版部、平成18(2006).5
- 29) 軍機保護法では第8条に「①陸軍大臣又ハ海軍大臣ハ軍事上ノ秘密保護ノ為必要アルトキハ命令ヲ以テ左ニ掲グルモノニ付測量、撮影、模写、模造若ハ録取又ハ其ノ複写若ハ複製ヲ禁止シ又ハ制限スルコトヲ得 1 軍港、要港又ハ防禦港 2 堡壘、砲台、防備衛所其ノ他ノ国防ノ為建設シタル防禦造物 3 軍用艦船、軍用航空機若ハ兵器又ハ陸軍大臣若ハ海軍大臣所管ノ飛行場、電気通信所、軍需品工場、軍需品貯蔵所其ノ他ノ軍事施設 ② 前項ノ規定ニ依ル禁止又ハ制限ニ違反シタル者ハ7年以下ノ懲役又ハ3,000円以下ノ罰金ニ処ス」とあり、これが軍人以外、一般人にも適用されることとなった。なお、同法は昭和20(1945)年10月に廃止された。
- 30) 長瀬昭之助：鳥瞰図絵師 吉田初三郎、222頁、前掲
- 31) 長瀬昭之助：鳥瞰図絵師 吉田初三郎、250～251頁、前掲
- 32) 長瀬昭之助：鳥瞰図絵師 吉田初三郎、224～225頁、前掲
- 33) 長瀬昭之助：鳥瞰図絵師 吉田初三郎、224頁、前掲
- 34) 藤本一美：「大正広重」吉田初三郎の世界、鳥瞰図絵師の眼、INAX BOOKLET、24頁、平成13(2001).3
- 35) 長瀬昭之助：鳥瞰図絵師 吉田初三郎、222頁、前掲
- 36) 東北歴史博物館編集・発行：観光旅行 大正～昭和初期のツーリズム、54～55頁、平成14(2002).3

- 37) 東北歴史博物館編集・発行：観光旅行 大正～昭和初期の  
ツーリズム、52～53頁、前掲
- 38) 観光社：天下の絶勝南知多遊覧交通名所図会、大正14(1925)
- 39) 栃尾鉄道株式会社：栃尾鉄道沿線図会、昭和2(1927).7、  
新潟県立図書館蔵
- 40) 長瀬昭之助：鳥瞰図絵師 吉田初三郎、34頁、前掲
- 41) 吉田初三郎：如何にして初三郎式鳥瞰図は生まれたか？、  
旅と名所22、昭和3(1928).6。なお、原文は該当する論文  
に当たることができなかったため、師橋辰夫：大正広重  
昭和源内、別冊太陽吉田初三郎のパノラマ地図、119～120  
頁、平成14(2002).10、平凡社、及び、宇治市歴史資料館：  
パノラマ地図と鉄道旅行、52頁、平成19(2007).9、から引  
用した。
- 42) 師橋辰夫：大正広重 昭和源内、別冊太陽吉田初三郎のパ  
ノラマ地図、120頁、及び、宇治市歴史資料館：パノラマ地  
図と鉄道旅行、52頁、平成19(2007).9